いる」

と謙虚な態度で、なるべく若い人々の邪魔にならないようにしていたとのことである。

龍渓先生はこうして気楽な副社長の椅子にいたところ、大正十五年（一九二六年）の秋、郊外の親戚の家を訪問する途中、乗っていた自動車が京王電車と衝突して、運転手は即死し、先生も重傷を負うて人事不省に陥った。しかし幸いにも意外に早く恢復して、半年後には外出も出来るようになった。先生が七十六才の時の出来ごとであった。

翌年昭和二年（一九二七年）の暮、副社長の任期が満ちたのでその職を辞した。六度毎日新聞社は先生の功に報いるため、相談役なる名誉職につけ、前職の待遇を与えることとした。この後は社用がある時に限って本社に出向くことにしていた。

先生には宮城県に別荘があったので、夏になれば其処に避暑をされ、その外は春秋の各季節に社用を兼ねて京阪の間を行楽して、風月を楽しむという、まことに気楽な晩年を送られていたのである。

かような悠々自適な生活を送っておられた龍渓先生も遂に病魔のおかすところとなり、夫人を初め近親の方々の手厚い看護の甲斐もなく、遂に不帰の客となられた。時は昭和六年（一九三一年）六月十八日で、行年八十一才であった。

夫人は佐久間氏で男子といい、六男一女の子宝に恵まれていた。

先生の著書は余り多くないが、大小合せて十余冊ある。次の通りである。

西洋俳人言行録、演説文章組立法、訳書説法、経国美談、日本文体文字新論、雨遊雑記、龍渓随筆、随筆精選、出雲目之記、浮城物語、新社会、駒李花吹雪、西洋哲人言行紀略（未刊）

（永宗）

文献紹介

寛龍公の書簡（新発見）

所蔵者　会員　河野松男氏

五月十五日の用書今夕相達候　遂初堂集節右衛門江中付出来ニ付差越相達候　宜致出来候旨可申聞候　袖珍方蔵中に有之候由右は序に天王寺屋江可返旨文之丞に可相達候　其余申越候趣共一々聞届候　右申遣候　以上

六月十一日

書物奉行共江

尚申候　蔵書出入損し等無之旨聞届候　尚又精々心被附　火ノ元別而入念可申候　当年は例ゑ炎暑烈敷候　其境如何ニ候哉　自重専一存候　以上

封

関谷典左衛門殿

木許茂兵衛江

五月十五日の手紙今夕届いた。遂（中国の県名か）の初堂集（書物の名）、節右衛門に中付け、出来たので送って来た。よく出来たと伝えてほしい。袖珍（小型本）の方は蔵（佐伯文庫の書庫）にある由、それは序に天王寺屋（本屋）に返すよう文之丞に伝えられたい。その外申越されたこといずれも承知した——（以下省略）

筆跡といい、文章といい、佐伯文庫八万巻の集書をなさった佐伯藩第八代高標候の手紙に相違なく、しかもまだ紹介されたことのない、新発見の資料で、河野会員の史料追求の、近来最大のヒットであると思う。とりあえず。

（羽柴）